

**第11回 理研バイオリソースセンター リソース検討委員会 諮問事項について  
細胞材料開発室**

日 時 平成24年2月28日(火) 14:00~16:32

場 所 富国生命ビル23階 海洋開発研究機構 東京事務所 共用B会議室

出席者

(委員等) 中畑 龍俊 委員長、赤池 敏宏、今村 亨、下村 恭一、許 南浩 各委員

(文部科学省) 土屋ゲノム研究企画調整官

(NBRP) 佐藤事務局長、

(事務局) 小幡センター長、阿部副センター長、中村室長、今泉研究推進部長、村上課長他

1. 実績について

評価コメント

【収集・保存・提供事業の量的・質的向上】

- しっかりとした方針に基づいて十分な実績が集積されており、着実に成果を挙げている。また、iPS細胞の提供実績、品質管理が充分になされており、順調に進んでいる。疾患 iPS の提供準備も順調に推移している。

助言・提言

【収集・保存・提供事業の量的・質的向上】

- ヒト臍帯血バンクの組織変更に対応したバイオリソースセンターの計画が必要と思われる。

【品質管理】

- 基盤技術の維持と発展のバランスをとることが重要である。また、基盤的技術の維持・継承の重要性を広報することも必要と思われる。
- リソース関連の技術についてもリソースとみなし、収集、管理、開発、供給について戦略的視点から可能なことに取組む必要があるように思われる。

【バックアップ】

- 提供細胞の緊急時におけるバックアップシステムについて、一段と整備されつつあり評価できる。

【昨年度のコメントに対する対応について】

- 提供細胞における実績検索システムの確立が理研 BRC の活動の成果を担保するうえで重要である。
- ユーザー発表論文数が少なく見えるのは、把握できている割合が少ないと思われる。対応策として、メールでの問い合わせ等の方策、発表論文数以上のインデックス(実使用数、学会発表数等)を考案してはどうか。また、提供された細胞が利用され、論文となったもののサマリーの作成を実施してはどうかと思われる。
- 世界的命名、背番号の統一活動をとおしてアジア、さらには世界の知的ハブとしての責任を果たして欲しい。
- 理研 BRC の中に産官学連携を強める組織設置を考えてはどうか。
- 一般市民への広報は対応されているが、製薬会社やバイオベンチャー企業向けの広報活動を実施してはどうか。さらには創薬に繋がる広報活動を考えてみてはどうか。

## 2. 次期中期計画及び NBRP 計画について

### 【収集・保存・提供事業の量的・質的向上】

- 25 年度からの第 3 期中期計画、26 年度からの新体制等、難しい部分があると思われるが、NBRP 計画をコアとして計画されている内容は正しい方向と思われる。
- 次期 5 年間を見越した場合、従来の細胞バンクに加えて iPS 細胞の保存は価値があると思われる。
- iPS 細胞時代に突入しており、飛躍的に variation が増加しており、疾患 iPS 細胞は今後ますます研究需要が高まると考えられ、これらの整備をすることは正しい方向であるとする。必要性、目標、体制、等についても十分だと思われる。
- 疾患特異的 iPS 細胞の保存・提供を一つの柱として、rare disease だけでも数千といわれている状況下において、どのような基準で iPS 細胞を選択していくか検討しておく必要がある。
- 最近の direct reprogramming で作られた疾患特異的な細胞も今後受け入れるのか検討が必要である。
- 受容体等の発現細胞株の収集・保存等が実施されるようになると、創薬研究に繋がると思われる。

### 【昨年度のコメントに対する対応について】

- 他の国際的細胞バンクとの関係で、ある種の棲み分けの可能性、さらには、理研 BRC の特徴と強みを確保しておくことが重要と思われる。上述の達成のために、現在の活動を分析し、細胞材料開発室の戦略構築が欠かせないと思われる。
- 細胞バンク間の国際的競争、国際的協調の絶妙なバランスを維持しながら、日本がそのリーダーシップを取って欲しい。理研 BRC として目指すバンク事業の重要性を守る観点から、戦略的キャッチフレーズの設定も重要と思われる。
- 国際的な協力関係を作っていくことが重要で、疾患特異的 iPS に関しては、理研 BRC がハブとして活動して欲しい。

以上